

## 日本原水爆被害者団体協議会、「ノーベル平和賞」を受賞!!!



## 目標16：平和と公正をすべての人に

「ノーベル平和賞」とは、「平和のために最大・最善を尽くした人物や団体」に贈られる賞です。2024年に「日本原水爆被害者団体協議会」が受賞。核兵器のない世界を実現するための努力と核兵器が二度と使用されてはならないことを被害者証言によって示してきたことが受賞の理由です。昨年12/10 ノルウェー・オセロの授賞式での日本被団協代表委員の田中熙巳氏(92歳)の演説を新聞記事で読



み、原爆被害者の方々の切なる願いや熱い思いを胸に刺さるものがあり、是非とも図書だよりで紹介すべきだと思いました。(以下は、2024/12/12 毎日新聞掲載より一部抜粋したものです。)

原爆投下11年後、1956年「日本原水爆被害者団体協議会」が結成される。2つの基本要求进行運動の柱

**①日本政府の「戦争被害は国民が受忍すべき」の主張に抗い、原爆被害は戦争を開始・遂行した国に責任がある。**

**②核兵器は非人道的な殺戮兵器で人類と共存させてはならない**として68年間、被爆者の立場から核兵器廃絶

を世界に訴える活動や被爆者援護を国に求める運動を今日まで継続。**『核のタブー』**[1945/8以降、核兵器

が戦争で使われていない。日本被団協や、ほかの被爆者たちのなみなみならぬ努力によって核のタブーが定着]

形成に大きな役割を果たしてきたが、今1万2千発の核弾頭が地球上に存在し、4千発が即座に発射可能

(広島・長崎の数百倍・数千倍の被害が予測される)。核大国の核の威嚇や、核兵器使用を口にする閣僚の出現

など、核のタブーが壊されようとしていることに怒りを覚える。

田中熙巳氏は13歳長崎で被爆。ガラス戸の下敷きになるが奇跡的にほぼ無傷で助かる。3日後、親戚の安否確認に爆心地へ。2人の伯母や従妹、祖父、叔父達5人も、たった1発の原子爆弾が一瞬で無残な姿に変え命を奪われた。倒壊し焼けこげの家、その周りの遺体、大けが・大やけどを負いながら生きている人々が放置されている地獄絵のような現実。原爆惨状を目の当たりにして愕然…。たとえ戦争であってもこんな殺し方、傷つけ方をしてはいけないと。被爆者達は、被爆後7年間もの間、占領軍によって沈黙を強制された。

さらに日本政府からも見放され、被爆後十年間余を孤独と病苦と生活苦、偏見と差別の渦中にさらされた。1954/3 日本の「第五福竜丸」乗組員が、太平洋ビキニ環礁でのアメリカの水爆実験で被爆。これをきっかけに国内で原水爆実験禁止・原水爆反対運動が高まり、1955/8「原水爆禁止世界大会」が広島、翌年、長崎で開催。これに参加した原爆被害者によって1956/8「日本原水爆被害者団体協議会」結成。「核兵器の廃絶と原爆被害に対する国の補償」運動を起し、1957年「原爆被害者の医療に関する法律」。1968年「原子爆弾被害者に対する特別措置に関する法律」が制定されるが、やはり国家の補償は無し。1994年「原子爆弾被害者に対する援護に関する法律」制定。が、しかし原爆で亡くなった死者に対する償いを日本政府は全くしていない。これ等の法律は、長い間、国籍に関わらず海外在住の原爆被害者に適応されず、粘り強く核兵器廃絶を求めて日本政府や核保有国に要請運動を推し進める。2016/4核兵器の禁止・廃絶を求めた国際署名1370万署名を国連に提出。2016/5オバマ氏が現職米大統領として初の広島を訪問、日本被団協代表委員の坪井直氏らと面会し握手。2017/7に、122か国の賛成を得て「核兵器禁止条約」制定される。(YouTubeに演説動画アップされています。この演説は見る価値あります。)

## 国って、自国民を守ってくれるんじゃないの?!

被爆者の方々は筆舌に尽くしがたい経験をされたはずですが、復讐や憎しみの感情をたちきり「被爆者」を二度と出さない為にと今日まで活動されてこられました。ここまでの道のりをうかがい知るだけでも、胸が苦しくなってきました。世間や社会、地域からの差別や言われなき偏見、そして被爆による健康被害等々、被害者の方々が、勇気を出して声を上げるのがどれだけ大変だったかと…。演説の最後で、【人類が核兵器で自滅することがないように。核兵器も戦争もない世界の人間社会を求めて共に頑張りましょう】と結んでおられます。

今号の紙面で、この問題を全て伝えることは、すこし無理があります。次号の図書室だよりでも、引き続き取り上げていきます。

つづく……

文責：図書部部長 M3-2 N.Y